

# 2021年度 情報活用カプログラム（基礎）自己点検・評価結果報告書

京都ノートルダム女子大学教育センター

(令和4年4月27日)

## 1. 授業内容・方法・成果

平均して例年概ね30名程度が履修しており、心理学を専門とする学生やWebデザインなどに興味がある学生、教員志望の学生の占める割合が高かった。キャリアにつなげることを目的としている学生が多く、ほとんどの学生が卒業までに、一部の学生については3年次後期または4年次前期末までに、プログラムを修了している。

学部在学学生全体から見ると本プログラム履修生の割合は多くないが、前述のとおりモチベーションが高い学生が履修している傾向があるため、履修を希望しながら修了に至らない学生は少ない。

多くの学生はキャリアに生かすことを目的として履修しており、心理学専門職としてデータを扱う場合や、マーケティングや情報系の企業での分析、教員として成績処理などをする際に、本プログラムでの学びを役立てていることが、卒業生アンケート等の分析結果から見て取れる。

学生による授業評価アンケートや、必修授業内で独自に実施している学生の自己評価からは、基礎知識が少なく理解に苦しむ学生が少なくないことが見て取れる。一方で、特にプログラム必修科目では各学科の専門教育科目につながるよう意識した内容としていることから、それぞれの専門の科目での応用や、卒業研究でのデータ処理などに生かされていることも同時にうかがえる。

卒業生へのアンケート結果によると、卒業生からは、学修内容が仕事で実際に生かせるなど後輩に推奨する度合いが高い。在学生へのアンケートからは、理解の難しさを感じていることもあってか、高い推奨度を示す結果は得られていない。ただし、在学生から聴き取ったところによると、卒業論文などでのデータの活用の際に生かせることを推奨する学生は多い。

## 2. 進路状況等

5年ごとに実施している卒業生調査の結果から、心理学科からは大学院に進む学生が多く、研究活動におけるデータの活用に生かされていることがわかる。マーケティングなどの分野に進出し学修成果を役立てている卒業生も少なくない。こども教育学科卒業生は教員になる者が多く、成績処理やこどもの状態の分析などにプログラムで学んだ知見を生かしている事例も見られる。

卒業後の進路先アンケート等による外部からの評価では、モラルや倫理関係に関しては学びが深まっている部分があるものの、プログラミングの技術や根本的なデジタル技術の理解などについて強化を図る必要があることが明らかになった。AIやデータサイエンスにかかる時間数増、関連する科目の新設などを検討する必要がある。

### 3. 履修者の確保のための工夫等

オンライン授業や AI・データサイエンスへの学生の興味は近年高まってきているが、令和4年度入学生は必修授業の受講者が20名程度の見込みであるが、令和3年度入学生が40名程度受講しており、昨年度と合わせると100名程度の受講生となる。今後、授業内容やカリキュラムは不断に改善を図り、現代的ニーズにあったプログラムとなるよう3年後を目途に見直すことを計画している。現在はプログラム修了と同時に情報処理士資格が取得できるが、令和3年度入学生からは上級情報処理士資格を併せ取得できることとしており、これらの取り組みにより今後いっそうの履修者数向上を見込んでいる。

授業では、学生による授業評価や必修授業内での毎回のコメント収集から把握できた学生の状況を踏まえ、難しい内容は授業内で復習する、授業期間中は資料をLMS上で閲覧可能な状況にしておくなど、履修者にとってより分かりやすいものとなるよう工夫している。その上で、小テストを適宜行い授業で扱った基礎的知識の理解度を確認しながら、併せて応用的事項も学修できる方法を取っている。

特に必修科目では、授業ごとに学生からのコメントを収集し、学生が興味を持つ内容を精選してオンラインで質問に答えるなどのフィードバックを通して、学ぶことの意義が理解できるようにしている。